

平成 3年 5月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859)

レンゲソウ今昔

げんげ田に かばん投げだし 遊ぶ子ら

列車の窓に 手を挙げにけり 松村泰太郎

かつては日本のどこの農村にも見られた光景です。水田には必ず裏作としてムギを蒔き、アブラナを植え、また田植えどきや肥やしとしてレンゲソウ（前記の短歌のようにゲンゲとも呼ばれています）を蒔いてある田がたくさんありました。それが5月ともなれば、一斉に花が咲いて、そこは子どもたちの格好な遊び場になったものです。相撲をとったり寝っころがったり、花を摘んで首飾りを作ったりして春の日長が暮れるまで遊びました。

しかし、昭和39年の東京オリンピック以後の経済の高度成長につれて産業構造が大きく変化して田んぼには休耕田が出現し、ムギも、ナノハナも、レンゲソウも姿を消してしまいました。さらに子どもたちの生活環境も大きく変わりました。テレビがどこの家にもはいつて室内遊びが多くなったことや学習塾や習いごとに追われる子が増えたことなどで外で遊ぶ子の姿も消えてしまいました。

市内東部の霞川沿いに広がる穀倉地帯、通称<木ノ下田んぼ>にも、かつてはこんなのかな光景が見られました。村の名の如く、霞みたなびく、うららかな風景は絵のようでした。

* * * *

中国原産のレンゲソウは江戸時代に導入され広く栽培されるようになりました。根に共生する根粒バクテリアが空気中の窒素をとらえるので、それを緑肥として田植えのとき、田んぼに敷き込みました。化学肥料などが無かった時代の偉大な知恵に感心します。また、田植えから収穫まで田に這いつくばるようにして手間ひまかけて作ったそのころの米のほう味がよかった、と懐かしむ声も聞かれます。

今年、この<木ノ下田んぼ>に懐かしいレンゲソウが帰ってきました。昨年の秋に蒔き、それがこのゴールデンウィークに花盛りになってレンゲソウ祭が行なわれました。絶好の行楽日和に恵まれ、花の美しさと郷愁とに誘われた多くの人で賑わったようです。

(文責 中西 勲)